

サーファーのマストアプリ
BCMの“波情報”を100%使いこなせてますか？

波情報を活用しよう!

波情報はただチェックするだけでは意味がない。重要なのは、その情報をどう読み解き、現場にどう繋げるかだ。数値や予報を鵜呑みにするのはなく、波の変化を予測するための“材料”として使うことが求められる。

潮の満ち引きはもちろん、
時間毎の風&波高も把握すべし

POINT

情報は頭に入れて現場で使える形に

アプリの情報に頼るだけでなく、自分の中に条件の引き出しを持っておくことが重要になる。実際に入ったときの記憶や印象と結びつけておくことで、現場で瞬時に判断できる精度が大きく変わってくる。

波のコンディションはサイズだけでなく、潮の満ち引きや風、波高の推移によって大きく変化する。掘れてるのか？たるいのかな？など、アプリを使えば当日だけでなく前後の詳細なデータも確認できるため、単発の数値ではなく流れとして捉えることが重要になる。風向きがそのポイントに対してオンショアかオフショアかを把握するのは基本だが、過去の傾向を蓄積していけば、現在の風からこれから良くなるポイントを導き出すことも可能になる。条件は常に動いている。だからこそ時間軸で読み解くことが、精度の高い判断につながる。



エリアごとの更新情報は
小まめにチェックしよう!

POINT

入水タイミングで読む波の変化を予測

波情報は有益だが、そのまま鵜呑みにするだけでは不十分。自分が実際に入水する時間を基準に、この先どう変化するかを読み解くことが重要。今の数値だけでなく、その後の推移を想定しよう。

波情報なしで海へ向かうのはキケンだ。着替えや片付けまで含めれば、海に入れる時間は決して長くはない。だからこそ、その限られた時間を有意義に使うためにも、波情報はこまめにチェックしておきたい。お気に入りのポイントが最新の更新かどうかを確認するのはもちろん、更新タイミングによっては周辺エリアの情報も合わせて見ておくことで、より状況を立体的に把握できる。また、前日や似た条件のデータをストックとして持っておけば、その日のコンディションの再現性も見えてくる。情報は単体ではなく、比較することで精度が上がる。

目まぐるしく変化する気象!
週間予報は必ず毎日チェック!

POINT

数値と感覚をすり合わせる

波情報の点数や評価はあくまで基準のひとつ。自分のレベルや好みによって感じ方は変わるため、そのまま受け取るだけでは不十分。実際の印象と照らし合わせることで、自分なりの判断基準が作られていく。

当日のコンディションだけでなく、週間予報まで確認しておくことで、波の変化を先読みできるようになるのだが、これは意外と知られていない。特にうねりは時間差を伴って届くため、隣接する海岸の状況もチェックしておけば、実際のサイズ感や到達のタイミングをある程度把握することが可能になる。ただし予報にはブレがあり、うねりの入り方が前後することも少なくない。だからこそ一度見て終わりではなく、毎日継続してチェックすることが重要になる。変化の流れを追うことで、コンディションの精度は確実に高まっていく。



改めて、BCM波情報サービスを前提に、その使い方を見直してみたい。

サーファーにとって波の良し悪しは、その日一日の満足度を大きく左右する要素だ。だからこそ、ただチェックするだけで終わらせず、どう活用するかが問われている。

波情報は進化した
読む力が問われる時代へ

今となっては当たり前の波情報。その起点は1990年頃、NTTのダイヤルQ2サービスによって音声による波情報が広く普及したことに始まる。当時は限られた情報を頼りに海へ向かっていたが、現在ではBCMをはじめとする波情報サービスによって、その環境は大きく変わった。

スマホひとつで主要ポイントの情報はほぼ網羅され、コンディションの点数表示に加えて、風向き、波高、水温、さらには装備の目安まで確認できる。さらにライブカメラによって、今の海の様子まで把握できるようになり、かつてのサーファーからすれば想像もできない精度で情報を得られる時代になった。

ただし、情報量が増えたからといって、それを使いこなせているサーファーばかりではない。数値や評価をそのまま受け取るだけでは、現場とのズレは埋まらない。波情報はあくまで、予測の材料であり、それをどう読み解き、自分の感覚と結びつけるかが重要になる。



実際に現場で毎日定期的に波をチェックし、スタッフがその目で見えた状況をレポート。サイズや点数といった数値だけでなく、その場のコンディションや時間帯ごとの変化、ブレイクの特徴まで含めた生の声がより具体的で精度の高い波情報としてユーザーに届けられている。

波情報といえばBCM!

中のヒトに「いい波をゲットするコツ」を聞いてみた!

週末サーファーでも いい波ゲットするコツ、教えてください!

波情報は、ただ見るだけでは意味がない。点数やサイズの裏にある条件を読み解き、自分の経験と結びつけて初めて“当てる力”になる。波情報のパイオニア「BCM」への取材から、その使い方と本質を探るヒントを提示する。



さまざまなデータをもとに精度の高い波情報を提供するBCM(ビーチコーミング)。その裏側には、サーファーでありながら波情報のスペシャリストとして日々データと向き合い、現場感覚と数値を結びつけながら情報を磨き続ける存在があり、全国各地で観測をおこなう。

参考にしてもらうのがいいと思います。その上で大事なものは、自分のレベルに当てはめて考えることです。点数は、絶対評価ではなく、相対評価になってしまいうので、例えば昨日の30点と今日の30点でも、波質や観測員の主観、サ

ーファアのレベルや使っているボードなど、いろんな要因が絡んできます。同じ30点でも中身は違うという前提で見てもらう必要があります。さらに言えば、同じポイントでも時間帯によって印象は変わりますし、同じサイズでも潮位によってブレイクの仕方は全然変わってきます。なので、その点数が、どの条件の中で出ているのか、まで含めて見ることで、ようやく判断材料として機能すると思います」

点数評価のポイント 基準は、真ん中。

では、その評価はどこを基準にしているのか。ここを理解していないと、点数の読み取りは簡単にスれる。

「同じ波は来ないというところもあってなかなか難しいんですけど、幅広いユーザーがいるので、基準としてはNSAの2級〜3級くらいをイメージしています。ただ、その中でもサーファーによってスキル差や好みの波はかなり違ってくるので、横に走ってターンアクションができる、真ん中を軸足にして点数を付けているイメージです。なので、その真ん中を基準にしながら、自分のレベルや好みに合わせてズレを調整してもらうことが大事になります。例えば、同じ30点でも、横に走れるか

どうか、を基準にしているの、リップアクションをしたい人からすると物足りないかもしれないし、逆にテイクオフや直進が中心のレベルの方にとっては十分に楽しめるコンディションだったりもします。そのズレを理解しておくことで、点数に振り回されるのではなく、自分の判断に引き寄せることができると思います」。

波情報は「ツール」 経験との掛け合わせて 精度を上げる

話は自然と使い方の本質へと移る。情報をどう扱うか。そのスタンスだ。

「結論として、波情報は判断基準の中のひとつとして使ってもらえばと思います。ご自身のスキルはもちろん、ホームにしているポイントや、使っているボードの特徴、好きな波質を踏まえて総合的に判断していくことが大切です。今出ている情報は基本的に過去の情報になるので、現地でチェックしているスタッフの点数も含めて、それをベースにしながら、自分の経験値や好みを重ねていくことで、最終的な判断につながっていくと思います。波情報だけで決めるのではなく、自分の中で組み立てていくことが重要です。例えば、同じ条件でも、自分が乗りたい波なのかどうか」という視点

サーファーにとって 最も有効なツール

波情報は、いまやサーファーにとって欠かせない存在だ。サイズや点数をチェックして海へ向かう。その行為自体は日常になっているが、その中身まで使いこなせているかは別の話だ。数字は便利だが、それだけでは足りない。地形や風、うねりの条件が重なったとき、同じ数値でも波はまったく違う表情を見せる。だからこそ必要になるのが、読み取る力だ。情報をどう解釈し、自分の判断に落とし込むか。その精度は経験と直結する。今回は、波情報サービスマ「BCM(ビーチコーミング)」を運営するライズシステムのスタッフに話を聞いた。テーマはシンプルだが奥深い。いい波を当てるために、波情報をどう使うか、である。

まず最初に チェックするべきは

最初に目に行くのは、やはり点数だろう。では、その点数をどう捉えるべきなのか。

「入口としてはやっぱり点数が有効だと思います。ただ、見るタイミングによって使い方は変わってきます。朝であればリアルタイムの情報が一番有効になりますし、夜に見るのであれば概況や予想を持つだけで選び方は変わってきますし、そこに過去の経験が積み重なっていくことで、だんだんと精度が上がっていきます」。

まずはサイズ、次に風 最後にうねり

複数の情報が並んだとき、人は迷う。その迷いをどう整理するか。

「一概には言えない部分もあるんですけど、今回のようにサイズ、風、うねりという3つで考えるのであれば、まずサイズ、次に風、最後にうねりの順で見てもらうのがいいと思います。うねりの周期や向きももちろん大事なんですけど、それらは最終的にサイズに反



新たに提供がスタートしたBCMならではのAI解析ツール「ウェイブスコープ」。波高や乗れる距離、サーファーの人数など多様なデータをもとに、24時間継続して解析を実施。観測員の主観に頼らない数値として波の変化を可視化し、より精度の高い判断材料として活用。



アプリ上で確認できるAI解析ツール「ウェーブスコープ」。波高や周期、乗れる距離などをとに解析をおこない、今この瞬間の状況を更新し続ける新たなサービス。本文でも触れたように、波情報は進化の途中にあり、未来の予測や新たな可能性へとつながっている。

波情報はサーフィンのためだけのものではなく、別の用途でも活用され始めている。「警察機関から映像提供の依頼を受けることもあります。水難事故や海岸でのトラブルなど、有事の際の記録として使われるケースが増えています。サーフィンのために設置しているものではありませんが、結果的にそういった社会的な

波情報が持つ社会的価値

波情報はサーフィンのためだけのものではなく、別の用途でも活用され始めている。「警察機関から映像提供の依頼を受けることもあります。水難事故や海岸でのトラブルなど、有事の際の記録として使われるケースが増えています。サーフィンのために設置しているものではありませんが、結果的にそういった社会的な

まだ進化する波情報とBCMのこれから

最後に、これからの展開について。ここでもキーワードはやはり「精度」だ。「観測スタッフによる情報はもちろん必要なんですけど、どうしても主観が入る部分があります。一方で、気象庁の波高データのようない客観的な情報は非常に参考になります。ただ、それはサーフィン用ではないので、そのままでは使いづらい部分もあります」。

最後に、これからの展開について。ここでもキーワードはやはり「精度」だ。「観測スタッフによる情報はもちろん必要なんですけど、どうしても主観が入る部分があります。一方で、気象庁の波高データのようない客観的な情報は非常に参考になります。ただ、それはサーフィン用ではないので、そのままでは使いづらい部分もあります」。

映される部分でもあります。例えば向きが合っていればサイズに反映されずし、周期が長くなれば本数は少なくてもパワーのある波になった結果としてサイズが決まるので、まずはサイズと風を見て、その上で予報データなどを活用しながら足し算と引き算をしていくことで、より精度の高い予測ができると思います。さらに言えば、風に関しても単純にオンシヨアかオフシヨアだけでなく、強さや時間帯の変化も含めて見ていく必要がありますし、サイズがあっても風で潰れてしまうケースも多いので、そのバランスをどう見るかがポイントになります」。

AI解析がもたらす変化 今の波をより正確に捉える

さらに、従来とは異なる視点も加わり始めている。AIによる波高解析だ。

「今「ウェーブスコープ」というサービスを提供していて、AIで波高を解析しています。例えば前回の波情報ではモコモコサイズだったとしても、AIの解析で波高が上がっているれば、実際にはサイズアップしている可能性があります。これは観測員の主観ではなく、実測に近い数値としての変化になります。波情報の更新が1時

間前だったとしても、AIのデータを見ることで現時点での変化を把握できるので、ポイントに着く頃のコンディションをより解像度高く予測できるようになります。そこに潮回りや風向きなどの条件を加えていくことで、判断の精度はさらに上がっていきます。特に朝イチなど変化の大きい時間帯では、このリアルタイムに近いデータがかなり有効になってきます」。

サーフポイントの理解 仮説と検証の積み重ね

話は再び現場へと戻る。最終的に頼るべきは、自分の中にある判断軸だ。

「岸の向きや風をかわすかどうかなど、基本的な情報を踏まえた上で、自分の中で仮説を立てて検証していくしかない部分もあります。この繰り返しで経験値はどんどん高まっていくと思います。ただ、その仮説を立てられる人は多くないと思うので、そういった人にも活用してもらえよう、AI解析や視覚的にわかりやすい情報の提供など、できるだけ直感的に使える形で届けるようにしていきます。ビギナーの方でも、まずはこの風ならここはどうなるか、といったシンプルな仮説から積み重ねていくことで、少しずつ見えてくるものが増えていくと思います」。

地形という不確定要素 人から得るリアルな情報

データで拾いきれない領域がある。代表的なのが地形だ。サンダーの位置や形状は常に変化し、同じ条件でもブレイクは安定しない。だからこそ、このパートは、現場の情報、が効いてくる。「サンダーは流動的なので、波情報サービスとしてポイントで伝えるのはどうしても難しい部分があります。なので、そういった情報はサーファー同士のコミュニケーションがすごく大事になってきます。あそこ地形が決まってきたよ」とか「引いたらあのピークが出てくるよ」といった情報は、現場にいるサーファー同士でしか共有できない部分でもありますし、そういうやり取りが結果的に精度の高い判断につながっていきます」。

さらに、現地コメントの役割も無視できない。「点数だけでは伝えきれない部分は、現地スタッフのコメントの中に入っています。例えば、ワイド気味とか、インサイド寄りとか、そういった一言で状況がかなり具体的にイメージできることもあります。なので、数字だけでなく文章も合わせて見ることが、より立体的に状況を把握できると思います」。このように、データと人。その両方をどう使うかで波の見え方は変わってくる。

過去データの活用 条件を重ねて精度を上げる

未来を読むためのヒントは、過去にある。同じ条件が揃ったとき、どんな波だったか。その積み重ねが判断の軸になる。「例えば同じ潮回りや波高のときにどうだったのかを見るのはすごく有効です。タイドが上げてきて100センチのタイミングで入るのであれば、前日に同じ条件でどうだったのかを見ておく。そういう過去の照らし合わせをしていくことで、判断の精度は上がっていくと思います」。単なる履歴ではなく、比較材料として使うことがポイントだ。

「一回一回の波情報を単発で見るとはなくて、条件ごとにストックしていくイメージですね」。この風向きでこのサイズ、この潮位るときはこうだった」というパターンが自分の中に増えていくと、だんだんと予測が当たるようになってきますし、外したときも、なぜ外したのかが見えてきます。「経験とは感覚ではなく、積み上げたデータでもあるのだという」。


情報の開放と マナーのバランス

便利さのウラには、必ず議論がある。ライブカメラも例外ではない。

「例えば波高とライディングの本数を組み合わせることで、自分が乗った波を後から確認できるような仕組みも考えていますし、将来的には、明日の波を見せる、ようなことも技術的には可能になってくると思います」。テクノロジーは進化し続ける。ただ、それをどう使うかは変わらな





現場で波をチェックするのは、我々と同じくいい波を求めるサーファーたちだ。日々の経験と観察によって培われた知見は、数値だけでは拾いきれないリアルな判断材料となる。AIが進化しても、人だからこそ感じ取れる波の質や変化こそが、最終的な精度を支えている。



武笠さん
BCMスタッフ

湘南エリアの波情報を現地で観測し発信するBCMスタッフ。自身もサーファーとして日々海に立ち、リアルな感覚と徹底した分析で情報を精査。いい波を求める視点と執念が、精度の高い波情報として我々に届けられている。





BCM (ビーチコーミング)

全国の波情報や波予想、ライブカメラ、気象データなどを提供するサーフィン向け情報サービス。長年の実績と現地観測に基づいた精度の高い情報を、WEBやアプリを通じてリアルタイムに発信し続けている国内最大級のサービスとして多くのサーファーに支持されている。